

英語学習者が出会う統語解析の困難について

小 川 明

0. この小論では、小川 (2004) で十分に論じられなかった問題のひとつをさらに発展的に考察してみる。小川 (2004) では、日本語を母語とする学習者がどのような時に文の構造が分からなくなり困難に陥るのか調べた。そこで述べたことのひとつは構造が分からなくなったら文の主語と述語を見付けることであった。これは宮下 (1982) が指摘していて、威力のある手がかりであることを明らかにした。

英語の文は大抵は主語と述語とから成ってをり、高校以上の読本に出る文の多くは主節と従属節とが立体的に組合はされて、主語と述語の組合せは三つも四つも現れます。そこで学生最初の関門は第一に主語と述語の組合せを見付けることで、第二に数組の組合せの中から文全体の中心となる(主節の)主語と述語とを選び出すことです。

たとえば次の例で試してみよう。

- (1) a. What people actually do in relation to groups they dislike is not always directly related to what they think or feel about them.
- b. A house in an urban area is easy to locate in America, because it is numbered and the street it is on has a name.
- c. Linguists at a distance from the 'inner circle' who might have felt sceptical about some aspect of the theory had no way to check, and by and large what they were unable to assess they

took on trust.

以下主語と述語の組合せを、太字と四角で囲む二通りの仕方で示すことにする。太字の主語には太字の述語が対応し、四角に囲まれた主語には四角に囲まれた述語が対応する。そうすると、(1)は次のようになる。

- (2) a. **What people actually do** in relation to groups **they dislike** is not always directly related to what **they think or feel** about them.
- b. **A house in an urban area is easy** to locate in America, because **it is numbered** and **the street it is on** **has** a name.
- c. **Linguists at a distance from the 'inner circle' who might have felt** sceptical about some aspect of the theory **had** no way to check, and by and large what **they were unable** to assess **they took on trust**.

主語と述語の組合せが分かるとほぼ文構造が明らかになるのが実感されるであろう。詳しくは小川 (2004) を参照して下さい。

1. 本ノートでは、このことをやや異なる角度から眺めてみたい。一般に文が長くなると、学習者にとって困難が増すと思われる。それでは英語ではどのような仕方で文が長くなるのであろうか。基本的には、S の数が増えていくことによって長くなる。以下文全体を指すとき「文」と言い、文の一部を構成している時つまり節の時、S と言うことにする。また / で S と S の切れ目を示すことにする。

- (3) a. **Helt believes**/that **her analysis confirms**/what **she describes** as a 'widely held' belief/that **British English is more formal and less relaxed** than American English.
- b. **Many of us remember** the amusement caused by an episode in a 1960s documentary about the Royal Family/**which showed** the then American ambassador ponderously explaining to the

Queen/that **his residence was subject** to 'elements of refurbishment',/when **he meant/that he had had to move** out of his house/while **it was being done up**.

(3a) は4つのSより構成され、(3b) は6つのSより構成されている。Sの数の差が2つにもかかわらず(3a)より(3b)のほうがはるかに長くなっているのは、含まれているS自体が長くなっているためである。つまり文の長さはSの数ばかりでなく、S自体の長さも関係する。

(4) 文の長さは、Sの数及びS自体の長さに比例する。

基本的にはSが短ければ学習者にとって困難は少ない。これは主語+述語がすぐ見つかるからであると思われる。常識的に考えられる予測はSそのものが短いと複数のSが連結されていても困難は少ないだろうということである。

(5) a. **I came/because I want** you to help me.

b. When **he stopped,/no one said** nothing.

さらに(6)では5つのSが連結されているが、S自体が短いので比較的困難は少ないように思われる。

(6) **I remember/when I was first learning** Japanese,/a woman was **sitting** beside me on the train coming back from Kyoto,/and I **asked** her,/where **she was heading**.

しかし実はSの種類と文中での位置が関係する。次の文の途中にある関係代名詞節のSは短いけれどそれほど簡単ではない。

(7)=(1b) A house in an urban area is easy to locate in America, because it is numbered and the street it is on has a name.

2. そして文が長くなることが文の構造を複雑にするだけではなく、日本語を母語とする学習者にとっては、もうひとつの困難を引き起こす。このことは思っている以上に重要な問題であると思われる。文が長くなると多分ネイティブスピーカーにとっても困難を増すと思われるが、以下の困難は日本語

を母語とする人にとって固有のものである。よく知られているように日本語と英語の語順は鏡像関係にある(久野(1973))。例えば、

- (8) a. Tom plays tennis. トムはテニスをする。
b. from Tokyo 東京から
c. When he was young 若かった時
d. the book which I bought yesterday 昨日買った本

自分のレベルにとって、簡単な英文であれば、日本語を介在させることなしに、直接理解できるであろう。しかし自分にとって難しい英文を読む時は日本語を介在させざるをえないと思われる。もし日本語を介在させて英文を理解していこうと思うと、かなりの部分ひっくり返しにならざるをえない。たとえば次の文を考えてみよう。

- (9) a. **I've forgotten** the name of the contractor/**who submitted** the bid/**that is now being considered** by the board.
b. 私は現在役員会が考慮している入札に応じている契約者の名前を忘れてしまいました。

長くなればなるほどひっくり返しの程度はひどくなる。そして多くの学習者が訳しているうちに何を言っているのか分からなくなってしまった経験を持つと思う。

整理すると、学習者にとって、文が長くなるにつれて

- (1) 構造が捉えにくくなる。
(2) 日本語を介在させて英文を理解していこうとすると、ひっくり返しの程度が強くなり理解しにくくなる。

最初の困難は既に宮下の指摘するように、基本的には主語＋述語の組合せを見付けることによってほぼ解決がつく。Sごとに主語＋述語を探していくことを繰り返せばよい。第二の困難はどうであろうか。できるだけひっくり返らないようにするためにはどうすればよいのであろうか。これは同時通訳の技術を応用すればよい。長い文を区切って前から順番に訳していけばよい。この点については、塩田(2001)が論じている。例を挙げよう(松本他(2000)より)。

- (10) a. I believe/this book will help / promote communication between the two countries.
b. 私は信じます/この本が役立ちます/両国間の意思疎通を促進するのに
c. きっと/この本によって/いよいよ意思疎通が両国間に高められてくるでしょう。
- (11) a. Ladies and Gentlemen,/I thank you very much/for inviting me to this party/in honor of Mr. Nakamura's first publication.
b. 皆様/どうもわざわざ/このパーティーに招待していただきまして/中村君の初めての出版記念を共に喜び申し上げますことを感謝いたします。

もちろん色々な手段によって通訳は (10c) や (11b) のように出来るだけ自然な日本語になるようテクニックを駆使するであろうが、学習者にとっては、日本語に直すことが問題ではない。日本語における少しの不自然さは我慢をしなければならない。英文を理解するための補助手段である。(9)は、このやり方を使うと次のようになるであろう。

- (12) 私はその契約者の名前を忘れてしまった/その契約者は入札に応じたのだが/その入札を現在役員会が検討中である

実は、この日本語への転換の問題と切り離しても、区切ること自体が英文を理解していくのに有効な役割をはたすことが指摘されている。

ところで、精読法に利用できる、初心者向けの手法を二、三紹介しておきたいと思います。英語の不得意な人は、文をどこで切っていいか、わからない。いやグループに分割すべきだ、ということも、知らないことが多い。無意識的には知らないことではないでしょうが。意識的に文をグループに分割する努力をする — これがグループ・メソッドです。だれでも、"on the table", "go to school", "the man who came yes-

terday"などは、気がつかないうちに分割しているでしょう。これを徹底的にやる。そうすると、努力なしに分割できるようになる。実を言えば、反復熟読という勉強法を続けていれば、無意識的にできるようになっているはずです。(柴田・藤井(1985))

このように文を区切っていくことは、言語の性質から見ても納得がいく。これは文がひと塊でなくより小さい塊が集まってできていることを認識することである。構造言語学では直接構成素で示され、生成文法では句構造で示された。

3. この小論では以下Sの切れ目に集中することにして、上に挙げた2つの困難を連関させて、それを乗り越えていく仕方を模索してみよう。ある文がいくつかのSから構成されているかは、主語＋述語の組合せがいくつかあるかを見ればよい。このことは、SとSの切れ目の問題と対応する。ひとつのSにひとつの主語＋述語が対応するのであるから、「主語＋述語を見付けよ」ということと「Sの切れ目を見付けよ」とは連関している。切れ目は機械的に見付けることができるのだろうか。もし機械的に見付けることができるならば、主語＋述語を見つけるための手がかりとして大きく役に立つことになる。

以下タイプごと切れ目を調べてみよう。SとSの間は/で示すことにする。
等位節

- (13) a. **Anna had to go** into town/**and she wanted** to go to Brid Street.
- b. **They tried** for three hours to steer the boat from the storm, /**but the boat sank**.
- c. **They may imply** the same sequence of uplift, erosion, and subsidence,/or **they may reflect** a fall and rise of global sea level.

切れ目はすぐ分かり、学習者にとってもやさしいタイプである。なぜなのか。対等に結合されていて、どちらが主節でどちらが従属節か判別する必要がないからであろうか。

従属節

- (14) a. **Staff and students are turning** the world of learning upside down during Alternative Learning Week/**as they try out** inventive ways of teaching and learning.
- b. **I couldn't feel** anger against him/**because I liked** him too much.
- c. **Brian would like** to increase his son David's wage,/so that **David doesn't get disillusioned**/because **his contemporaries in less skilled jobs are earning** more.
- d. **He was astonished**/when **Pauli responded** to their music with rough and rude Berlin slang.

(14) のように、従属節が主節の後に付いている場合は簡単である。従属接続詞に続く要素をすべて1つのSとすればよい。つまりSの最後は文の最後に一致する。前に付く時はやや切れ目が難しい場合がある。多くの場合カンマで区切られていてすぐ分かるが、カンマがない場合がある。その時はわかりにくい。

- (15) a. While **he was** still in the stable,/there was a loud knock at the front door.
- b. While **she stayed** at Binsey/**many came** to seek help and healing from the fugitive saint.
- c. And if **Miss Luft hadn't gotten** to a phone/**he probably would have killed** her....
- d. Though **his eyes took** note of many elements of the crowd/through which **he passed**/**they did** so morosely.

切れ目を見付けるためには、主語＋述語を見付けるという最初の方針に戻れ

ばよい。2番目に出てくる主節の動詞を見付けてその直前の主語を同定すればよい。それ以外に補助的な手段がある。一般に NP NP の連鎖は1つの構成素にならない、つまり NP と NP の間には必ず切れ目がある (15b)。また主格の代名詞があればその前は切れ目になる (15c-d)。

名詞節

that 節の場合大抵は主節に後続するので、うしろの切れ目は文全体の最後になり、分かりやすい。that に後続するものを S とすればよい。

- (16) a. **They believe/that the minimum wage could threaten** their jobs.
b. **It is unlikely/that any insect exceeds** about twice this velocity.

しかし文頭にあるとき、うしろの切れ目はわかりにくい。副詞節とは異なり、常にカンマはない。

- (17) a. That **Saints managed** to cause an upset with nothing more than direct running and honest endeavour bodes well for Great Britain.
b. That **the medical technicians were available** does not make the government's conduct any less offensive.
c. That **the period might** therefore **throw up** conflicting views of linguistic modelling, descriptive techniques, and the inter-connection between language and society is hardly surprising,/nor is it novel.

しかし that 節の中にある動詞の次に出てくる動詞を見付ければよい。そうすれば that からその動詞の前までが自動的に文全体の主語になる。ここでは、文全体の主語と述語を四角で囲んである。副詞節と異なるのは、後続する主節の主語はなくて that 節自体が主節の主語になっていることである。カンマは主語と述語の間には普通来ないので生じない。カンマを手がかりにすることは出来ない。

疑問詞で始まるSもまったく同じように考えればよい。主節に後続する場合は簡単である。文全体の最後と一致する。

- (18) **Any reciprocal learning will depend mainly on/what Japanese companies choose** to make available.

文頭にあるときは that 節と同じようにやや難しいが、見付ける要領は全く同じである。

- (19) a. **What could be at work there** **is an actual enmity** towards the very structure of society.
b. **Why the NTSB was not invited to participate in the investigation by the Mexican authorities** **is not known.**

時制を持つ定型動詞を含まないが、不定詞と動名詞についても、同様に考えればよい。

- (20) a. To attempt to forecast the effect on a national scale/is very difficult.
b. Understanding how a planet generates and gets rid of its heat/is essential.

関係代名詞節

文の最後に付いている時は簡単である。関係代名詞から文の最後までがSになる。カンマが付いていればなおさら分かり易い。(21b) では2つ関係代名詞が連続しているが切れ目は一目瞭然である。

- (21) a. **He walked down** to Broadway, the main street of the town,/
which ran parallel to the river.
b. **I've forgotten** the name of the contractor/**who submitted**
the bid/**that is now being considered** by the board.

難しいのは文の途中にある、特に主語に付いている関係代名詞節である。最後の切れ目を見付ける必要がある。カンマが付いている時は分かり易い。しかしすべきことは2番目に出てくる主節の動詞と述語の組合せを見付けることである。

- (22) a. The lowest pressure ratio which will give an acceptable performance is always chosen.
- b. Speakers who share a particular language seem to recognize similar prototypes for at least some of the language's categories.
- c. Then the woman that they actually caught and pinned down would not have been Margot.
- d. Ivan said/ Sue, whom he met two years ago, had spent almost every hour with him during and since the operation.
- e. Like many **who met him in those days/I was soon charmed**.

関係副詞節

- (23) a. **Specialist nurses have** particular expertise in one field of nursing, usually in an area/where **the patient and family need** teaching and support.
- b. The major reason why these researchers have reached different conclusions is /that **they have used** competing criteria.

比較節

- (24) a. Maybe **Henry would realize/she was not as nice/as she pretended** to be.
- b. **Distances were** in fact **reported** as being shorter/**than they were** in reality.

このように見てくると、SとSの先頭の切れ目は形式的に示されている。また切れ目を示す語の数は限られていて、学習者にとって既知のものである。ただわずかであるが示されない例がある。(i) 関係代名詞, (ii) that 節の that, (iii) if が省略されている場合などである。

- (25) a. **Angela was the only person/I could talk to**.

- b. **I do beg** you to consider seriously the points/**I've put** to you.
- c. **I confess/I have got plans/you may find** a little startling.
- d. **Should ministers decide** to investigate an inquiry,/**we would welcome** it.
- e. **Had I known/that there was** never to be another opportunity,/**I would have filmed** the occasion.

しかしどれも切れ目はすぐ分かるようになっている。関係代名詞節の主語は代名詞のことが多い。that の省略の時、主節は短い。If の省略の時、語順がひっくり返りすぐ分かる。

4. S の後尾の切れ目を見付ける難易度を調べてみよう。従属節の S が右端に付く時は一番簡単である。多くの場合 S の後尾は文全体の最後と一致する。またいくら S が結合されても切れ目はすぐ分かる。

(26) **John owned a cat/that killed a rat/that ate cheese/that was rotten.**

しかし日本語を介入させる時は(27b)のように切れ目ごと前から訳さないと分かりにくくなる。

(27) a. ジョンは腐っていたチーズを食べたねずみを殺した猫を飼っていた。

b. ジョンは猫を飼っていた/その猫はねずみを殺した/そのねずみはチーズを食べてしまったのです/チーズは腐っていたのですが

左端に従属節の S がある場合は後尾の切れ目はマークがないので、主語と述語の組合せを見付けることやカンマによって判断する必要がある。それだけ右端のタイプより難しい。切れ方には2つのタイプがある。

従属接続詞に導入される S 例文 (15) 主節の主語の前で切れる。

名詞節 例文 (17) (19) 主節の動詞の前で切れる。

しかし日本語を介在させる時は英語の順序のまますればよいので、その点は楽である。

(27) a. When the telegram came and I read of his death, I couldn't believe it.

b. その電報が来て、彼の死亡について読んだとき、信じられなかった。

一番難しく思われるのは、(22)のように従属節の S が文の真ん中に埋め込まれたタイプである。S の後尾を見つける必要がある。この問題は「中央部埋め込み(central embedding)」の問題と関係するように思われる。これはある構成素が同じタイプの要素の真ん中に埋め込まれていることを言う。次の文では、The book is on the table. の S の真ん中に the man left という S が埋め込まれている。

(28) [The book [the man left] is on the table].

これが何度も繰り返されると容認不可能になるといわれている。しかし Sampson (2001) は実際にかなり見つかることを指摘している。

(29) a. But don't you find [that the sentence [that people [you know] produce] are easier to understand?

b. [The only thing [that the words [that can lose -d] have in common] is, apparently, that they are all quite common words].

c. [The odds [that your theory will be in fact right, and that the general thing [that everybody's working on] will be wrong,] is low].

これが処理が難しくなるのは、同時にいくつかの S を解析しなければならないからだと考えられている。1つの S の解析が終らないうちに別の S を解析しなければならない。右端と左端の場合には、いつでも処理すべき S は 1つであった。

そして切れ目に注目して今までのように日本語にしていくと、これらの例は下線部の部分がうまく日本語にならないのである。(29a) (29b) はそれぞれ今までのやり方で日本語に転換したものである。

- (30) a. しかし気がつきませんか/文/人々/あなたが知っている/発する/
それはほかのより理解しやすいことを
- b. 唯一のこと/語/-dを失う可能性がある/それが共通にも持っている/
どうやら/その種の語はすべてきわめてよく使われる語である
ことです。

下線部はそれぞれ「あなたが知っている人々が発する文」「-dを失う可能性がある語が共通に持っている」までひっくり返らないと分かりにくい。中央部埋め込みが英語でも日本語でも困難を引き起こすのは単なる偶然であろうか。そのようには思えないのである。これについては機会があったら調べてみたい。

5. 最後に実際に今までのやり方を使って英文を理解してみよう。

- (31) a. **Yamagata's (1958) investigations established the fact/that the number of tillers and ears increase with the intensity and quantity of light,/while Stansel found (1967)/that favourable yield response to high levels of nitrogen occurs /only when the crop receives high light levels.**
- b. ヤマガタの調査は次の事実をはっきりとさせた/ひこばえと穂の数は光の強さと量に比例することを/一方スタンセルは次のことを発見した/たくさんの窒素に対して収量がふえるという反応が起こるのは/それは作物がたくさんの光を受ける時のみである。
- (32) a. **It might be argued/that children experience difficulties in the area of language development/precisely because the normal developmental process have broken down.**
- b. 次のように主張できるであろう/子供は言語発達の面で困難に出会うことがある/まさに正常な発達の過程がだめになってしまったために。
- (33) a. **The leaflet angered parents, staff and governors/because**

they said/it was full of misleading statements/and the individuals who produced it had not identified themselves.

- b. そのちらしで親、職員と理事は怒った/その理由は彼らが言うには/そのちらしには誤解させるような言葉がいっぱいのっている/また個々の人は/そのちらしを作った/自分が誰かを明らかにしていない。

6. このノートでは英語学習者が躓く統語解析の問題をどのように解決していったらよいかについて論じた。主語と述語の組合せを見付けることと、日本語を介在させる時、Sの切れ目で区切って後に戻らない方式を提案した。動詞は定型動詞のみを対象としたが、文が長くなるという観点からは、不定詞、動名詞、分詞構文も範囲に入れたほうが都合がよい。つまり非定型動詞も対象にした方がよいが、ほぼここで示したやり方で解決できると思う。

* 例文の出典に関してはいちいち述べなかったが参考文献、特に Biber et al. (1999) やその他の言語学、英語学の文献から利用させていただいた。感謝いたします。

参考文献

- Biber D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1999) *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*, Heinle & Heinle.
Collins Cobuild English Grammar (1990), Collins.
Kimball, John (1973) "Seven Principles of Surface Structure Parsing in Natural Language," *Cognition* 2 (1), 15-47.
久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店。

- 松本兼太郎・向 鎌治郎・中沢弘雄 (2000) 『通訳教本—英語通訳への道』大修館書店。
- 宮下真二 (1982) 「学生達はどこで落ちこぼされたか」『翻訳の世界』1月号。宮下 (1985) に所収。
- 宮下真二 (1985) 『英語はどういう言語か』季節社。
- 小川 明 (2004) 「統語解析についての試論 — 英語学習者の出会う困難」『東京家政大学研究紀要』第44集(1)、191-201。
- 大津由紀雄 (2003) 「言語心理学 16-17 文理解(1)-(2)」『英語教育』7-8月号。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Sampson, Geoffrey (2001) *Empirical Linguistics*, Continuum.
- 塩田久美子 (2001) 「日英語の語順比較と第二言語習得」東京家政大学修士論文。
- 柴田徹士・藤井治彦 (1985) 『英語再入門 読む・書く・聞く・話す』南雲堂。